ティー・ブレイク

NO. 72

さ　く　ら

日本では，3月は別れの月，4月は新しいスタートの月である。ただ桜は，いずれのシーンにもよく合う。私の高校の恩師は，本当に桜が好きな人であった。

桜が好きな人は，大抵同じことを言うものであるが，先生も，桜は満開で桜色一色になったものが散り行く様が美しい，と言い，短期間の間に突然咲いて突然散るのが良い，短命なのが良い，というようなことを言っていたように思う。いずれにしても，3月の別れと4月の新たなスタートという年度の切れ目に，よく合うのであろう。この「別れと新たなスタート」を繰り返して，人間は成長していくものだと，先生は言っていた。

ただ，成長するというのは，別れの連続である。成長すれば，富士山に登れば浅間山が低く見えるのと同じように，今まで高かったものが低く見えるようになる。今まで光り輝いていたものがその光を失うこともある。

今となってみれば，あの頃は偉大に見えていた学校の先生方も，それなりに客観視することができる。実際に，社会に出て暫く経った後は，先生との音信もずっと断っていた。

ところがある日，ひょんなことから再会をした際に，「桜切るバカ。梅切らぬバカ」というようなことを仰った。そして，これは，梅というのはすぐに伸びるものだから，どんどん切ってやらねばならない一方で，桜というのは一度切ってしまうとそこから先は伸びなくなるので，切ってはいけない。翻って，樹にも色々と個性があるように，人間にも個性がある。であるから，人間というものを，一律に，画一的に取り扱ってはいけない。それぞれの個性を認めて，個々に，それぞれ違うように扱わなければならない，と教えて下さった。

ただ，花冷えとはよく言ったもので，それを聞いたときに，その時期特有の冷えが，私にぞっとするような寒さを感じさせたのである。

よくよく思い起こしてみれば，先生は，学校の教員でありながらも，実際には，学校の画一的な教育方針に反対だったのだと思う。色々と誤解はあったのであるが，先生は先生なりに，現在の画一的な教育制度というものに疑問を持ちながら仕事をしていたようである。あのぞっとした花冷えの感覚は，言葉の裏にある暗いものがそうさせたのかもしれず，また，あの諺の重みが，指導をする立場にある今の自分にずしりと来たからなのかもしれない。

翻って，今年は，かつてないほどの暖冬で，東京では雪らしい雪が一度も降らなかった。春の訪れも早く，史上で最も早く桜が開花した。奇妙なことに，お彼岸の日は桜が満開であった。

先生の「桜」の話が聞けることはもうないが，たまにこうして先生の墓前に赴き，一生徒になってみるというのは良いものである。そして，こうして改めて眺めてみると，墓所には意外に桜の木が多いことに気付く。そしてまた，御影石の墓石に桜の花びらというのは，何とも合うものであろうか。そうして，人は死んでも，桜の季節はまたやってくる。

それにしても，先生は本当に桜が好きな人であった。　　（正）